観光の環境誌 1
――まなざされる国の生成――

関　　礼子

はじめに――「持続可能」という逆説

繰り返されることが前提だからこそ、日常は平凡な日常になる。私たちは朝がきて夜がくることを特別なものとは思わない。私たちの生命は持続することが前提だからだ。重篤な病気や怪我をしたときにはじめて、平凡な日常はかけがえのないものになる。日常の持続が大切な関心事になる。空気がおいしいと感じるのは「おいしくない空気」への気づきであり、「きれいな空気」を求めるのは、「汚染された空気」への気づきである。日常をともに過ごすパートナーを「空気のような存在」と表現するとき、私たちは既に、普段はとりたてて意識しないが、それなしには存在しえない関係性に気づいている。

「持続可能な（sustainable）」という表現も同様である。持続可能な環境、持続可能な観光という表現をするときに、もはや環境も観光も「このままでは持続可能ではない」ということが前提になっている。良好な環境を保ちつつ地域を維持していくために、地方は観光をオプションとして選択してきた。そのための政策的支援も行われてきている。だが、こうした地域活性化戦略は、地域主導という形態をとりつつ中央の意志のもとに従属しており、都市が地方に見いだす癒しのイメージに組み込まれ、経済活性化という名目のもとで消費されることも多かった[1)]。

観光による地域活性化戦略には、成功もあれば失敗もある。1970年代、産業構造の転換期の新しい地域開発の手法である「村おこし」「地域おこし」は、「内発的発展」の成功例として注目された。大分県の一村一品運動や北海道池田町のワインの町づくりなどはその一例で、現在でいうなら地域ブランド化戦略の成功例である。他方で、1987年の総合保養地整備法（リゾート法）制定を契機とするリゾート・ブームでは、リゾートの失敗やテーマパークの破綻により、その跡地を廃墟として抱えなくてはならなくなった地域があった。経済本位の観光開発は、地域イメージをはじめとする観光資源を――環境も含めて――摩耗・劣化させてしまう。ひとときの観光需要（観光産業需要）の創出によって地域が潤ったとしても、外部の論理はおかまいなしに新しい観光欲求を創造し、その地域から観光客を引き離してしまうことが可能なのだ。事実、そうしてリゾートのフロンティアは移り変わってきた。

いったい、持続可能性とは何なのか。誰にとっての持続可能性なのか。持続可能な環境と観光は、地域社会の持続性との関係で、どのように考えることができるのか。ここでは、観光の歴史を参照しつつ、この問いに向き合っていきたい。

ここでは第1に、観光の来歴を環境社会学の文脈に位置づける。「環境は社会を映し出す鏡」であり、「環境について考えることは、社会について考えること」（関 2009：2）であるし、観光資源とは概して環境と社会のなかに存するものだからである。

また第2に、観光と環境がせめぎあってきた関係性に留意しつつ、観光のまなざしが向けられてきたモノやコトの現在性に着目する。ここでは、

歴史は単なる過去の出来事として記述されない。過去と現在とを行き来しながら歴史の持つ現在的な意味に注目し、それぞれの地域のなかで物語（ナラティヴ）を紡いでいく動的なものとして歴史は参照される。

「どこにもお手本がないどころか、先進国のやり方が軒並み行き詰まり状態になっている今は、海図のない海へ船出するのと同じで、どちらへ向かって進むのが安全かわからないから、舳先に立って海の中を見るのかソナー（音波探知機）を使うのか知らないが、その場その場で暗礁を避けながら慎重に船を進めるほかない」（石川 2009：165）としても、だからこそ、私たちは私たちの居場所を知ることなしに、船を進めることはできない。過去を問うということは、私たちが生きる現在の立ち位置を知り、未来と向き合うことに他ならないからである。

1 「まなざされる国」の生成――観光の黎明期

観光の歴史は3つの時期に区分できる[2)]。第1は、明治から戦後の復興期に至るまでの観光の黎明期である。第2は、戦後、特に高度経済成長期を経て台頭するマスツーリズムの時期であり、第3は、マスツーリズムからの脱却をめざすオルタナティブ・ツーリズムが生まれてきた時期である。

本稿では、日本における観光がどのように生まれてきたのか、観光の来歴について江戸時代に遡って概観したうえで、観光の黎明期である明治から大正、昭和初期の観光について論じていく。

幕末から明治にかけて、日本を訪れた外国人の「観光のまなざし」（アーリ 1995）は、欧米とは異なる他者としての日本のイメージを賞賛した。大正時代になると、グランド・ツーリズムの流れにのって、日本に大勢の外国人が訪れるようになった。「まなざされる国」の誕生である。観光を国策として推進していく動きが生まれ、これに伴ってまなざしの対象や郷土愛を表象する事物を保護しようという欲求が生まれた。1919（大正8）年に制定された史蹟名勝天然紀念物保存法、1931（昭和6）年に制定された国立公園法は、こうした必要と欲求の結実とみることもできるのだ。

「まなざされる国」の生成過程から明らかにするのは、明治から昭和初期の観光が示す3つの特徴である。第1は、国威誇示と外貨獲得のために国策として推進されたことである。第2は、国際的な移動を伴う観光産業は平和な状況のもとで進展するということである。第3に、観光は自然保護の制度化を促しながら展開してきたという点である。

1.1 観光以前――江戸時代

(1) 江戸の「旅」

観光は近代のまなざしのなかで産声をあげた。観光とは、他国・他郷を訪れ、その土地ならではの風景や文化、習俗といった他国・他郷の「光を観る」ことである。観光は近代の産物であるとはいえ、観光につながる現象は近代化以前にも存在していた。

日本で旅が大衆化したのは江戸時代である。お伊勢参りや湯治のための旅があり、「東海道中膝栗毛」の弥次さん・喜多さんの滑稽な旅に心躍らせた人々がおり、「月日は百代の過客にして、行きかう年も又旅人なり」で始まる趣深い「奥の細道」の旅があった。松尾芭蕉が晩年、「旅に病んで夢は枯野をかけ廻る」と詠んだように、病に行き倒れる者もあり、無事に戻ってくることが当然の旅ではなかった。だが、それでも人々は旅に出た。

こうした旅が、昨今の「江戸ブーム」のなかで脚光を浴びてきた。

往路と復路の街道を違えて周遊する江戸の旅は、道中に見て食べて経験すること全て――病気や行き倒れのリスクや「護摩の灰」（いまでいう置き引き、どろぼうなど）の危険も含めて――が、「壮大なアミューズメントパーク」（国立歴史民俗博物館 2008：10）。であった。旅人たちはガイドブックでもある絵図をながめて旅の計画を練り、

名所をまわり、道中を楽しんだ。ただ目的地をめざして一直線に移動する中世ヨーロッパ型の巡礼と違い、複数の目的地をめざす周遊型の旅は、寺社や霊山への参詣、名勝地の見学など、物見遊山的な性格を有していた（神崎 2004：74-76）[3]。現在のツアーが、いくつかのハイライトを重ねて旅のクライマックスを迎えるように、江戸の旅にはハイライトが複数あった。

たとえば、「一生に一度は伊勢参り」という思いを抱いた旅のなかで、伊勢神宮参拝というクライマックスの前に、旅人は興津の鯛、日坂のわらび餅、桑名の焼き蛤など各地の名物を味わい、おおいに旅を楽しんだことだろう。旅の計画を練り、旅に必携のアイテムを準備し、移動を楽しみ、土地の名物を食べ、買い物をする。かつての旅人たちを楽しませたコトは、現在の観光の楽しみに通じる。旅人は土地の名物や土産物の購入など旺盛な消費行動を示した。派手に散在する旅の消費文化は、街道や宿場町の賑わいを支えた（金森 2004）。

もちろん、昔も今も、豪遊の旅だけが旅ではない。時に無一文で旅をする「おかげ参り」や「ええじゃないか」は、街道に生きる人や行きかう旅人の「袖すり合うも他生の縁」にすがる、究極の貧乏旅行といったところだろう。その延長だろうか。人の情けを借りながら、ひとり（一匹）で江戸から伊勢参りに出て戻ってきたという「伊勢参宮の犬」の話も伝えられている（鈴木 1965：76-77）。

江戸時代の旅は、今に息づく歴史や伝統のルーツとして、現代にも生きている。福島県南会津の檜枝岐村で受け継がれている檜枝岐歌舞伎は、お伊勢参りで持ち帰って以来の歴史を持つと言われている（写真 1）。

主要街道に残された松並木や杉並木は、各地で自然保護の対象になったり、地域のシンボルになったり、地域づくりのテーマになってきた。たとえば、旧日光街道の道路拡幅のための日光太郎杉伐採に反対する運動は、環境判例を紐解くと必ずでてくる事例である[4]。神奈川県大磯町にある旧東海道松並木、静岡県清水町にある長沢の松並木などは、往時の街道の面影を現在に伝えている町の名所であるし（図 1、写真 2、3）、東海道五拾三次の宿場（保土ヶ谷宿／程ヶ谷宿）として栄えた横浜市保土ヶ谷区では、江戸時代の松並木を復元する事業計画（東海道保土ヶ谷宿松並木復元計画）が、国土交通省の「東海道ルネッサンス事業」のなかで市民参加で進められた（図 2、3）。昨今では、東海道を歩くということ自体がブーム

写真 1　檜枝岐歌舞伎

注：「千葉之家花駒座」の奉納歌舞伎。座員は村民である。

図 1　広重の東海道五拾三次（旧大磯宿の松並木）

出典：後藤茂樹編 1975『東海道五拾三次（浮世絵体系 14　別巻Ⅱ）』集英社。

写真２　大磯町の旧東海道松並木

写真３　清水町の長沢の松並木（旧東海道松並木）

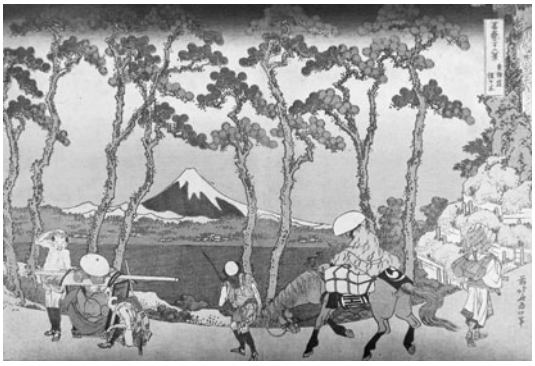
になっており[5]、観光パンフレット等には東海道五拾三次の絵図が積極的に用いられている。江戸の商業主義（コマーシャリズム）のなかで育った浮世絵は、旧東海道沿いの地域活性化のための広告（コマーシャル・アート）塔になっている（写真 4）。

(2) 江戸への旅と街道の利

江戸時代は街道に並木や一里塚が整備され（写真 5）、江戸、京都、大阪の三都間の交通をはじめ、全国の交通が発達した時代であった。人びとが「一生に一度は」と憧れた旅は、こうした街道の整備があって普及したものである。

異国の人にとっても、日本を旅することは魅力的なものだった。幕府が箱館、横浜、長崎など 5

図２　北斎の富嶽三十六景（保土ヶ谷から見た富士）

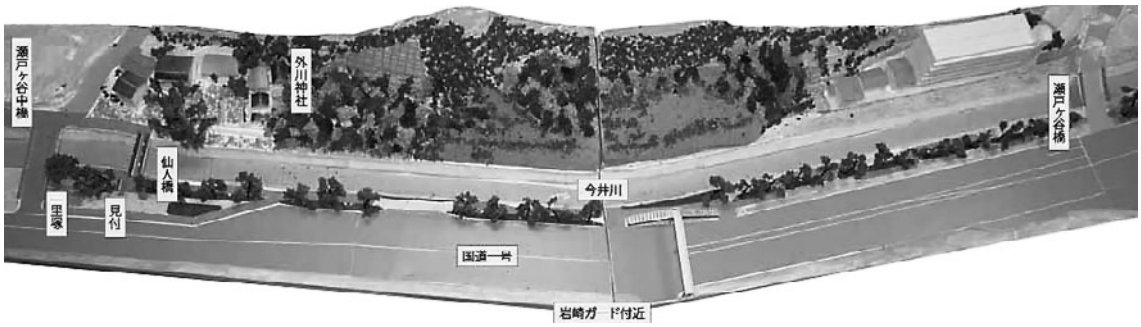


出典：後藤茂樹編 1975『富嶽三十六景（浮世絵体系 13 別巻Ⅰ）』集英社。

写真４　東海道五拾三次の絵図を用いたパンフレット

注：JR 東海（上）と静岡県富士市（下）の観光パンフレット。2012 年 1 月入手。

図３　東海道保土ヶ谷宿松並木復元計画の立体模型



（制作：東海道保土ヶ谷宿松並木プロムナード実行委員会）

出典：神明社 HP（http://www.shinmeisya.or.jp/rekisi/matunamiki.html）より引用。最終閲覧 2011 年 1 月 31 日。

写真５　静岡県清水町にある宝池寺一里塚と玉井寺一里塚

注：宝池寺一里塚（左）は 1965 年に原型が損なわれたために復元されたものであり、玉井寺一里塚（右）は昔のままの姿を留めている。この２つの一里塚は同時期につくられ、道路をはさんで対となっている。

港を開港したのは 1859（安政 6）年のことである。幕末の頃に日本を訪れた外国人は、この国の旺盛な移動エネルギーを支える街道を賞賛した。

1986 年に来日したスイス人のアンベールは、「東海道は、ヨーロッパの大きな道路に比較して少しも劣らないばかりか、全道を通じて、歩行者

のための人道を持っており、しかも日陰をつくるよく茂った樹を植えてある点で勝っている」（アンベール 2004：201，205）と述べた[6)]。ツュンベリーは、江戸への道中、筑前でこの国の道路に排水用の溝があり、砂がまかれ、箒で掃かれ、埃たつ時期には散水されて、いつでも良好な状況に保たれていることに感嘆した。「開化されているヨーロッパでは、旅人の移動や便宜をはかるほとんどの設備が、まだ多くの場所においてまったく不十分」なのに対し、「ここでは、自慢も無駄も華美もなく、すべてが有益な目標をめざしている」のである（ツュンベリー 1994：107）。ベアト撮影の東海道と沿道の松並木（写真 6）、スティルフリードが撮影した日光街道の杉並木の写真（写真 7）は、アンベールの言葉を頷かせるに十分な力を持つ。

日本を「礼節の国」としたケンペルも同様だった。街道の道幅には余裕があり、道の左側を江戸へ上る人、右側を下りの人が通行する。日本橋からの距離を一里塚で知ることができ、街道の分岐点には道標がある。旅人に涼を与える松の木が沿道に植樹されている。街道には排水口があり、道は箒で掃かれ、馬糞などの汚物もない。身分が高い者が街道を通る前には、雨で道がぬかるむのを防ぐための砂山が道の両端につくられる。こうした街道管理のあり方を、ケンペルは細かく書き残している（ケンペル 1977：16-19）

街道が良好な状態に保たれていたのは、江戸幕府が支配のために街道整備をし、諸大名に街道の維持管理をさせたからだが、それだけが理由ではない。それは、街道沿いに住む人々の「必要」の結果でもあった。「街道を管理する者は、近所に住んでいる百姓が欲得ずくで不潔なものを利用するので、道路を清潔に維持することについては、ほとんど苦労することがな」かった（同上：18）。「集めたものは、肥料にしたり、ものを燃やす時に使って再利用」するからで、「この『リサイク

写真 7　日光街道の杉並木

出典：新人物往来社 2005『異国人の見た幕末・明治 JAPAN』新人物往来社：47。
出典注：今市　日光街道の左右にそびえる杉並木は、その巨大さと荘厳さでしばしば外国人たちを圧倒した。明治初～中期（スティルフリード撮影／モノクロ）

写真 6　東海道の松並木

出典：新人物往来社 2005『異国人の見た幕末・明治 JAPAN』新人物往来社：24。
出典注：東海道の松並木　広く平坦でよく管理された街道、行き交う人々の賑わいに、外国人はおおいに驚き、感心した。幕末～明治初期（ベアト撮影／モノクロ）

リング』はもちろん、環境保護のためというより、むしろ貧困のゆえになされたものであった。旅人が便所として使用できるように、道ばたには小屋が立てられたり、あるいは単に壺が置かれているだけのこともあった。これも貴重な肥料を集めるためであった」と指摘されている（ボダルト＝ベイリー 2009：185-186）。

(3) 循環型社会としての街道空間

とはいえ、貧困がリサイクルの決定的要因だったわけではない。江戸（江戸時代もしくは都市としての江戸）が「循環型社会」、「リサイクル都市」と特徴づけられるのは、そこに優れた手本が見出されるからである。たとえば、布や紙のリユースやリサイクルが徹底的に行われていた。着物はつぎをし、紙はすきかえて古紙再生したし、東北の庄内地方などには古い帳面を用いて、丈夫で着心地の良い「紙布（しふ）」を織り上げる技術もあった。

都市部から近郊に屎尿が運び出され、「肥え」とする資源循環もまた、循環型社会・江戸の優れた事例としてあげられてきた。同じ頃、屎尿が未処理のままに流れ込んでいたパリのセーヌ川やロンドンのテムズ川では深刻な水質汚濁がみられたが、江戸の水辺は快適に保たれていた（鬼頭 2010：153-156）。

江戸の循環型社会システムが貧困のために成立したのではないのと同様に、街道沿いの人々は貧困のためにリサイクルしたのではない。「肥え」が良質の肥料だったからリサイクルしたのであるし、経済的にすぐれた資源だったからこそ、熱心に集めたのである。「肥え」は町方家主や大屋（家主株を買って地主にかわり地代店賃を徴収する役目）が売る資源であった。大屋の収入は「百両の株ならば給与年額二十余両、余得十両、糞代三～四十両」だったといい、「江戸では尿は溝に棄て、屎は厠に貯え、得意の百姓に売る」が、「上方では尿は借屋人の権利」、「大阪では屎代は家主のもの、尿は借屋人のもの」など、地域によって異なるものの、明確な権利関係があった（鈴木 1965：240）[7]。

したがって、旅の賑わいは宿や茶屋の商いだけでなく、沿道の人々にも「肥え」という資源獲得のメリットをもたらしていたことになる。称賛された管理の行きとどいた街道は、旅人に良し、商売に良し、沿道の人に良しの「三方良し」だったのだ。

とはいえ、ケンペルがこのリサイクルに閉口しないわけでもなかった。

> 「百姓の子供たちは馬のすぐ後から付いてゆき、まだぬくもりのあるうちに馬糞をかき集め、自分たちの畑に運んでゆく。そればかりでなく旅行者の糞尿さえ同じ目的で拾いあげ、またそのために百姓家近くの街道脇には、便所として作った小さな粗末な小屋があり、その中にも糞尿が溜めてある。すり切れて投げ捨てた人馬の草鞋も同様にこの小屋に集められ、焼いて灰をつくり糞尿にまぜるのだが、これはどこでも肥料として使われる。田畑や村の便所のそばの、地面と同じ高さに埋め込んだ蓋もなく開け放しの桶の中に、この悪臭を発するものが貯蔵されている。百姓たちが毎日食べる大根の腐ったにおいがさらにそれに加わるので、新しい道がわれわれの眼を楽しませるのに、これとは反対に鼻の方は不快を感ぜずにはいられないことを、ご想像いただきたい。」（ケンペル 1977：18-19）

ケンペルのつぶやきは、においの感性が大きく変化した現在にあって、同情に値する。パリやロンドンのような水質汚濁はなかったが、外国人にとっては甚だ不愉快な悪臭公害が発生していたのである。ツュンベリーもまた、伊勢地方でこの強烈な悪臭の洗礼を受けた。それこそ、「どこの村を行く時も、楽しみどころか、そこかしこで苦渋をもたらすような困難に堪えねば」ならなかった（ツュンベリー 1994：137）。

「各家に不可欠な私的な小屋［厠］は、日本の村では住居に隣接して道路に向けて建てられている。その下方は開いているので、通りすがりの旅人は表から、大きな壺のなかに小水をする。壺の下部は土中に埋められている。尿や糞、また台所からの屑類は、ここでは耕地を肥沃にするために極めて丹念に集められているが、暑熱下にしばしばそこから非常に強く堪え難いほどの悪臭が発生する。

それは鼻にどんな詰め物をしても防ぎ切ることはできないほどの、またふんだんに香水を使いこんでもまったく無駄なほどの悪臭である。この経済性の高い日本人の分室［厠］は、どこでも非常に役立ち有益であるが、また一方、彼らの目にはとりわけ有害であることがわかった。というのは、そこから発散される蒸気に国民は徐々に馴化してしまっているが、それは目を強く刺激し、大勢の人々とくに高齢者はそのために目が真っ赤になり、痛み、そして目やにを出している。」（同上：138）

この臭気と蒸気さえなければ完璧なシステムは、循環型社会形成推進基本法の制定・施行（2000年）前後から注目されてきた。昨今の先進的な試み――生ゴミを堆肥化して農地に還元する地域循環システムの形成、家畜の糞尿をバイオマスエネルギーとして利用する地域性の高いエネルギーシステムの開発、下水汚泥の堆肥利用を地域単位で進めるなど――は、江戸の循環型社会システムの現代版である（もっとも、残念ながら福島第1原発事故以後に、その評価は微妙に変化せざるを得ないのだが）。異なるのは、資源といいながらも、それらの価値が逆有償的な側面を持っていることである。

(4) 日本趣味

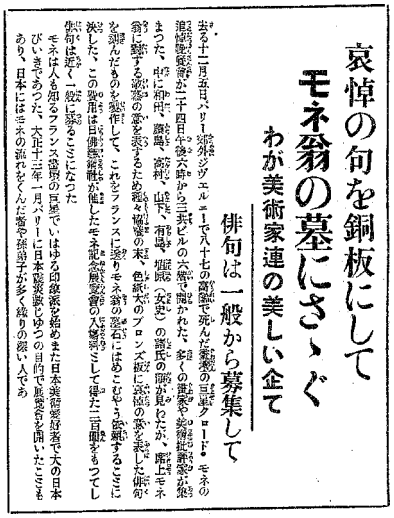
旅好きの江戸庶民だったが、自由に旅することができたわけではない。旅は「往来手形」を手にしてはじめて可能であった。関所を越えるには他に「関所手形」が必要で、関所破りは天下の重罪だった[8)]。

もちろん、幕末に日本を訪れた外国人の移動は厳しく制限されていた。幕末の日本を旅できたのは、ごく限られた目的を持つごく限られた外国人のみである。1865（慶応元）年に来日したシュリーマンは、「素晴らしい評判を山ほど聞いていたので、私は江戸へ行きたくてうずうずしていた」が、江戸に入るための招待状を得るために友人の親切なとりなしが必要だったと記している（シュリーマン 1998：113）。だが、そうした幕末にあっても、既にこの国に対する賞賛の声は海外に届いていた。1862（文久2）年の第2回ロンドン万国博覧会に日本から産業・芸術作品（工芸品）が出品され、西欧は「日本の芸術性」に強く関心を持った。シュリーマンは、「工芸品において蒸気機関を使わずに達することのできる最高の完成度に達している」と、高い評価を伝えた（同上：167）。

工芸品だけではない。日本の絵画＝浮世絵は西欧に大きな衝撃を与えた。1860年代、フランスを中心に「ジャポニズム」と呼ばれる芸術運動が急速に広がった。その契機となったのが、1856（安政3）年のブラックモンの北斎漫画の発見であり、1867（慶応3）年の第2回パリ万国博覧会への日本の参加だった。日本の浮世絵は、中心をずらし、遠近法がなく、影もない平坦な構図や印象、色の濃淡で空間の奥深さを表現するなど、これまでにない世界観を提示し、フランスの印象派の巨匠たちにインスピレーションを与えた（大島 1992）。

たとえば、ボストン美術館所蔵のモネの「ラ・ジャポネーズ」は、「日本の役者衣裳の壮麗な刺繍がほどこされた厚ぼったい着物を着せてポーズさせている。右手に扇子をもち、バックの壁面や日本製薄縁を敷いた床面には、一面に団扇が散らされてあり、一見して日本趣味を明らかに示している」（同上：209）。モネは親日家としても著名だった（図4）。食堂には浮世絵を飾り、彼がモ

図４　モネの逝去に際しての新聞記事


哀悼の句を銅板にして
モネ翁の墓にさゝぐ
わが美術家連の美しい企て
俳句は一般から募集して

出典：朝日新聞（1927 年 2 月 25 日）

チーフにし続けた睡蓮の庭には浮世絵から着想を得た木橋がかけられていた。

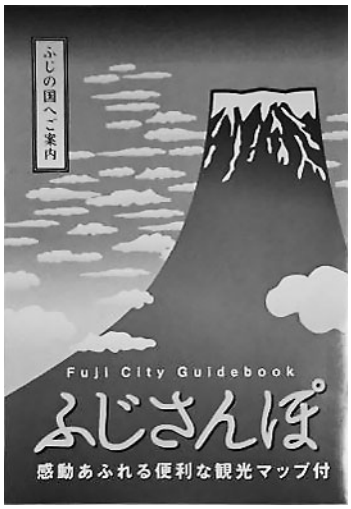
ゴッホは「タンギー爺さん」で人物画の背景に何枚もの浮世絵を配し、同じように日本趣味をわかりやすく描いた。マネの「ゾラの肖像」の背景にも屏風絵や歌麿（Ultamaro）の浮世絵がある（Aznar, J.C., ―（年不詳）: 56）。なじみ深いロートレックのポスターに使われた黒、そして平坦な色遣いも浮世絵から着想を得ているという。

ただし、構図や技法など浮世絵の模倣にもかかわらず、印象派と浮世絵には本質的な対立がある。「前者が印象の明快な単一さから色調分割のもたらす多様な光の振動に達したとすれば、後者は模糊とした自然の多様さから単純な限られた色数の色面調和に達したということができる」のであり、「それはそのまま両者の精神的風土のちがいの当然の帰結」なのだ（同上: 163）。

こうしたジャポニズムは、フランスのみならずアメリカ、ロシアなど各国でみられた（羽田 2005、モロジャコフ 2011 など）。とはいえ、「一九七〇年代末。日本の浮世絵が印象派をはじめとする一九世紀後半のヨーロッパ美術界におおきな『影響』を与えていたことは、まだ必ずしも一般の常識とはなっていなかった」というから（稲賀 1992: 355）、ジャポニズムの「発見」は日本が江戸という新鮮な他者に出会う契機であったかもしれない。明らかに浮世絵を連想させる、古くて新しいジャポニズム的なもののイメージは、海外からの観光客を呼び込もうとする現在にあって、国内の観光客に向けてもいにしえの他者への「日本趣味」をくすぐる観光（コマーシャル）広告として戦略的に利用されている（図 5）。ここで明確に意識されているか否かはわからないが、浮世絵の「青」[9]が旅にもたらす効果について、次のような指摘がある。

「そもそもわれわれの眼に親しい日本的風景といえば、まず空であり、水であり、遠くつらなる山々であって、したがってそれらがいずれも『青い』といってなんの不思議もあろうはずはないのであるが、しかしそうした空、水、山

図５　現代のジャポニズム的な観光イメージ



出典：富士市観光課発行のパンフレット。2012 年 1 月入手。

なみが、まず何にもまして旅人の旅情に深く食い込んでいくものであることも疑いなく、とすれば、それらが共に青天に反映して帯びる青色が、日本的旅情を彩る主調色を構成しているということも、またたしかなのである。すぐれた風景版画はそして、淡いあさぎ色から水色、さらにブルーを経て藍色、つづいてさらに濃紺からほとんど漆黒に近い色へと微妙に推移する藍を主調として、それを中心に計画されたいわば『色彩の詩』ともいうべきものなのである。そこには、旅情を支えている受動的でしかも素朴な自然観照という誠実な観察と、その観察を組織的に秩序づけて表現しようとする積極的な色彩設計とが、同時に並存していることがみとめ得るのである。」（大島 1992：151）

日本的風景が青い自然にあり、日本的旅情をかきたてる色が青だという指摘は興味深い。それが同時に外国人にとっても心惹かれるもの、すなわち観光資源になるからである。

青い自然への青い旅情が制約なく解き放たれるのが明治時代である。まず 1869（明治 2）年に江戸の旅人を悩ませた関所が廃止され、英国に外債を募集しての新橋・横浜間の鉄道敷設が始まった（1872 年全線開通）。翌 1870（明治 3）年に本陣が廃止され、旅籠と同じ扱いになった（大島 1989：308-310）。そしてさらに、自由な移動は、限られた人のみが限られた機会にしか移動できなかった外国人にも広がっていくのである。

1.2　観光の黎明期――明治時代

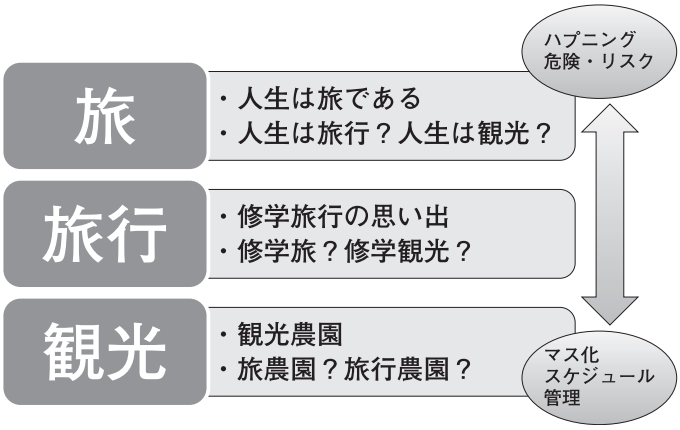
(1)「観光」と「外客」の誕生

外国人の日本国内での移動も段階的に認められるようになった。1874（明治 7）年には、病気療養や研究調査目的に限り外国人が内地旅行権を獲得し、1899（明治 32）年にようやく外国人が国内を自由に移動できるようになった（富田 2008：88）。この過程のなかで、「観光」と「外客」（外国人旅行者）がセットになって誕生するのである。

では、「観光」とは何か。「観光」は「旅」でもないし、「旅行」でもない。似たような言葉であるが、そのニュアンスは全く違う（図 6）。「観光」という言葉が誕生したことには意味がある。人生は「旅」であるが、「旅行」や「観光」にはなりえない。修学旅行は「旅」でも「観光」でもない。観光農園は旅農園や旅行農園と名称を変えると客足が落ちそうだ。「観光」は、「旅」や「旅行」とどんな違いがあるのだろうか。

「観光」も「旅行」も、近代の申し子である。旅行は鉄道という近代公共交通の発達によって生

図 6　旅と旅行と観光の違い



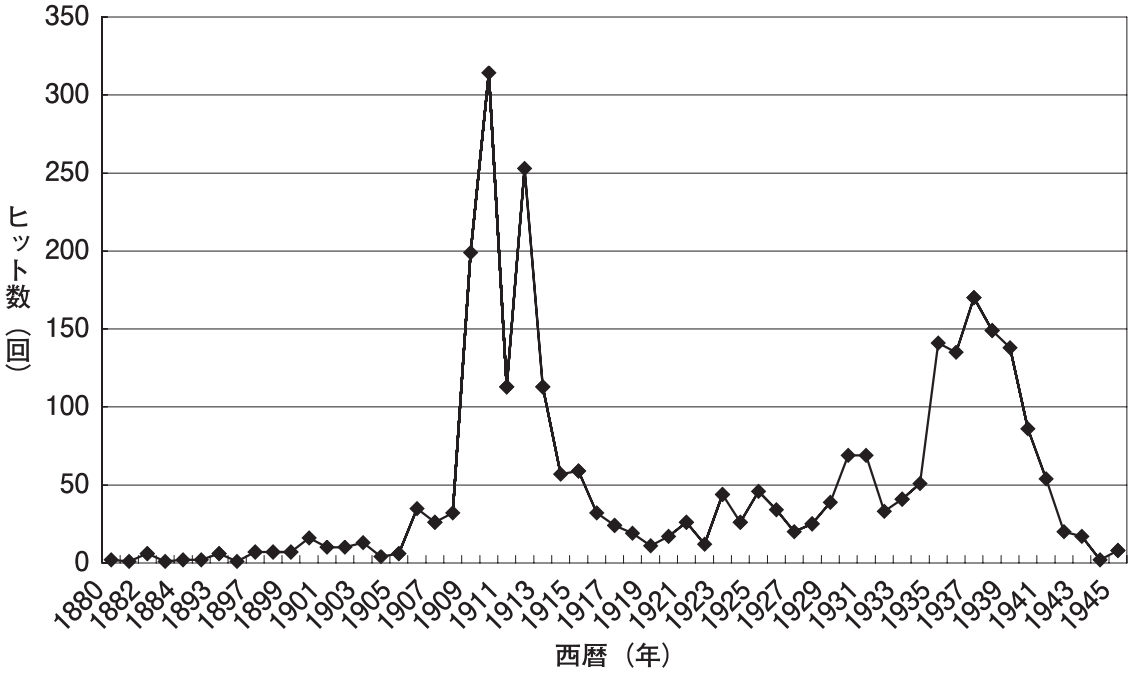
まれた。近代以前の庶民の「旅」はもっぱら徒歩による移動だった。「人生は旅である」という表現が示すように、旅は予期せぬ出来事に遭遇し、旅の終わりがどのようなものかは最後までわからない。だが、交通網の発達によって「行って戻る」ことがかなりの程度、保証されるようになる。大勢が一度に移動することも可能となる。こうした鉄道の時代が「旅行」という新しい言葉を欲していくのである。ちなみに、日本で団体旅行のはしりとなる修学旅行が始まったのは1882（明治15）年である[10]。

当時の『東京朝日新聞』（以下、朝日新聞と略）の記事をデータベースで検索すると、明治から戦前にかけて、「観光」という言葉は新聞紙面に2,860回登場している[11]。図7は年次ごとの「観光」ヒット数を示したもので、初期には数件の広告も含まれている。広告欄には、貴客接待もできる「観光社」（船主）の汽船運行案内（1882（明治15）年3月15日、21日）、多様な症状に薬効のある「上野観光堂」の漢方薬（1882（明治15）年10月1日、1884（明治17）年6月11日）、第三回内国勧業博覧会に出品して賞を得た「観光繻子」[12]（1890（明治23）年7月29日）などが掲載されており、「観光」という言葉が――その意味については措き――流行しはじめていたことが窺える。

いわゆる現在的な意味で「観光」という言葉が用いられたのは、国境を越える移動で、しかも見聞を広めるような場合だった。「観光」は「外客」とセットとなるのに対し、国内に居留する外国人が国内を移動する場合を含め、国境を越えない場合は「旅行」が用いられることが多かった。どうやら「観光」は、移動手段の変化が必要とした言葉ではなかったようである。

観光は近代の産物である。近代国家が生まれ、その枠内外で自由な移動が可能になった。近代ツ

図7　朝日新聞データベース検索による「観光」ヒット数



ーリズムは団体で移動するマス・ツーリズムを生みだした。この移動がもたらす旺盛な消費のエネルギーがインセンティブになって、以後、観光はその政治的・経済的・社会的位置づけを確立していくのである。

『新編大言海』は、観光とは「他国の栄華を観る義」であり、「他国を巡行して、その土地、風俗、制度、文物、を観察すること」だと定義する（大槻 1956）[13]。素直に「国」を近代国家として捉えるならば、「観光」には上述したような「越境」という概念が含まれてくる。事実、明治期の新聞では「観光」と「外客」はセットで語られた言葉であった。ちなみに、他の辞書を見ると、「他国」のほかに「他郷」が入ってくる。これは日清・日露戦争後の領有権の変動の影響があるとみられ、実際、徐々に「観光」と「旅行」の使い分けはあいまいになり、明治末には国内旅行にも「観光」という言葉が使われはじめる。1912（明治 45）年 5 月 2 日付け朝日新聞は「夥しい観光客」と題し、次のように論じている。

「四月の花時を中にして夥しい田舎のお客が東京に入り込んだ。四百人、五百人の団体が幾組となく新橋や上野から運び入れられ、その他、二、三の組は際限なくあった。それがため、停車場（ステーション）付近の宿屋は近年希有の上景気で、何れも喜悦措くところを知らぬという有様。

この多くのお客は何れも善光寺や日光や本願寺詣を口実にして、傍ら東京見物をしたのである。上野駅で調べてみると、最も多くの収入のあった日は四月七日で、一日一万一千六百四十四円六十二銭という大金に達している。次は十六日の一万八百余円で、四月中の一日の収入はいつも七、八千円を下らなかったという。これを平年の四月に比すると、まさに一割ばかりの増収である。一日一万円以上の収入のあったのは、上野駅としては大博当時以外にない。」

神社参拝や周遊の旅といった江戸の旅との連続性を持ちつつ、鉄道の整備や博覧会の開催など、近代の観光がもつ“楽しみ”という要素が国内の旅行にも入り込んできたが、「観光」はやはり「外客」とセットであり続けた[14]。

「観光」の記事が多くみられるのは、1909（明治 42）年から 1914（大正 3）年頃にかけて、ちょうど日露戦争（1904-05 年）が終了し、第一次世界大戦（1914-18 年）が始まる間の時期である。そして、そのような関心の高まりの中で、1912（明治 45）年に、半官半民のジャパン・ツーリスト・ビュロー（後述）が創設され、観光が国の重要産業として展開されていくことになる。

(2) 観光の経済効果

明治期の「観光」が「外客」とセットであったことには、政治的にも経済的にも大きな意味がある。近代国家形成に邁進していた日本にとって、観光はすなわち民間外交であった。それは外客に日本の栄華を示す（国威誇示）ことによって、国際的に劣位におかれた状況から脱するための手段として見出され、資源に乏しい国が外貨を獲得し、国力を増強するための重要な産業と位置づけられるようになっていく。

「観光」関連記事の内容の変遷からも、それは明らかである。当初は、「誰が、いつ、どこに来たか（来るか）」といった情報が記事になっていた。だが、そうした記事に混じって、明治 30 年代には、観光の経済的効果に関する論評がみられるようになった。1901（明治 34）年 6 月 17 日の朝日新聞は次のように記している。

「近年観光外客の渡来するもの著しく増加し、殊に毎年桜花の頃には便船ごとに多数の来遊者あり。ただ昨年は北清事変のため一昨三十二年に比し二割を減じたるも、各開港の調査によれば、上等旅客のみにて二万九百人あり。これらの旅客が本邦滞在中に費消（ママ）するところの費用は少なくとも一人一千ドルに下らざるべく、今、仮に一人の消費高を一千ドルとせば実に二千九

十万円の巨額にしてその利益はなはだ少なしとなさず。将来、ますます彼らの来遊を促すこと最も肝要なるが、その方法の第一着として港口、税関、交通、旅舎等の設備を完くする等、日本の事情に通ぜざる将来の外人をして意を安んじて全国を漫遊せしむるの用意肝要なるべしとある人は語る。」

外客がもたらす経済効果をより詳細に計算した、1902（明治35）年9月23日の朝日新聞記事もある。

「外人渡来者の数は調査困難なるも一ヶ年一万人と仮定して、うち観光客三千人、職務用兼観光者二千人、旅行のついでをもって観光する者二千人、寄港者三千人位の割合にして、その旅行先は東京付近は日光、伊香保、熱海、箱根より東海道、静岡、名古屋、伊勢を経て京都、大阪、神戸、広島より関門付近長崎等なり。滞在日数は二、三ヶ月に及ぶものあるも、多くは五、六週間にして、最も短きは二、三週間なるものあり。仮に五週間平均滞在するものとしてその消費額を見積もるに、上等客は宿料、飲食、旅費等を一日三十円として千五十円、買い物その他雑費九百五十円、合計二千円。中等客はこれに準じて千二百円とするときは、平均一人の消費高千六百円にあたり、寄港者の消費高は五十円ないし五百円位なれば平均二百五十円に見積もり、前記の人数により計上すれば観光者の消費高は一千百二十万円、寄港者の分七十五万円、合計千二百万円となり、この他稀には一万円ないし十万円の消費をなすものあり。その他、外国軍艦は常に沿海を航行して各港湾に碇泊することなれば、その乗組員の消費高もはなはだ少なからざるべく、すべてこれ外国人が我が国の風光を賞し、美術品を愛するために輸入する金額にして、総額二千万円以上にのぼるべしという。」

観光は日本の重要な財源であり、観光の推進は国益にかなうのである。観光客を増やすために、外客の不便を解消することは急務だった。そのため既に、1893（明治26）年には外客を誘致し接遇するための「喜賓会（Welcome Society）」が設立されていた。1903（明治36）年には案内者（ガイド）の質を高めるために免許制にする「案内者取締規則」が出された[15]。

(3) 観光地の誕生と観光団の増加

欧米人が宿泊するホテルは、西欧風であると同時に日本的でエキゾチックな趣向を持っていた。1873（明治6）年創業の日光金谷ホテルは、創業者の屋敷を用いた「金谷カテージ・イン」から始まり、1893（明治26）年に洋式の「金谷ホテル」をオープンさせた。1878（明治11）年創業の箱根「富士屋ホテル」は和洋折衷の建築様式であるが、そこにある日本とは、「西洋というフィルターを通した日本」であると指摘されている（山口2007：85）。

この二つのホテルでは、多くの外客が出入りした明治時代の建築物が現役で用いられており、往事を偲ぶことができる[16]。また、日光も箱根も、早くも明治時代に国立公園設立の考えが生まれた地域であり（後述）、これらホテルは当時の代表的な観光地を育て上げ、また観光地化に伴って大きく育った民間ホテルである。

他方で、観光は国威誇示の手段でもあった。1890（明治23）年開業の帝国ホテルは欧化政策の一環として井上馨、渋沢栄一、大倉喜八郎など、政財界の大物の肝いりで創設された。いわば「国策事業」として生まれたホテルである[17]。不平等条約改正のために欧化政策を進めてきた井上は、鹿鳴館に続く社交の場として帝国ホテル建設を構想した。帝国ホテルは表敬訪問や会談など社交の場としても用いられたが、外客は避暑に不向きの東京を避けるため、初期は閑古鳥が鳴く状況もあった（武内1997：42-43）。帝国ホテルは、1902（明治35）年に箱根富士屋ホテル、日光金屋ホテ

ル、京都都ホテルといった日本を代表するホテルと「五大ホテル同盟」を結成し（福田 1996：70）、共通宿泊チケットを発行するなど外国人観光客に便宜をはかり、観光の推進に大きな力を発揮した[18]。

明治時代後半になると、数名から数十名規模の観光団が日本を訪れるようになった。外客の急増を受けて、受け入れホテルの整備が望まれるようになり、1908（明治 41）年には帝国議会で「来遊外客待遇の設備に関する建議案」が提出され、決定をみた。『官報号外　明治 41 年 3 月 15 日　衆議院議事速記録第 15 号』に掲載された建議案は以下のようなものである。[19]

「近時外人の来遊するもの頻に増加し、而して毎年数万の外客が我が国において消費する金額約二千万円を下らず。然るにこれに応ずる『ホテル』の数足らず。加るにその設備はなはだ不完全にして外客を満足せしむること能わざるは、国際上及び経済上、深く遺憾とする所なり。況や大博覧会の開設は近く目睫の間にせまり『ホテル』の増設を要することいよいよ急切なるものあるに於てをや。故に政府は速やかに適当の方法を講じ、来遊外客待遇の設備を完くせらむことを望む。

右、建議す。」

1909（明治 42）年末から 1910（明治 43）年初頭には、700 名とも 800 名ともいわれたクリーブランド号米国大観光団が訪れた。以後、数百人規模の観光団が幾度も訪れており、観光（＝世界一周のグランドツアー）の流行とマス化（大衆化）の状況を垣間見ることができる。ただし、クリーブランド号の寄港に際し、横浜ではマス化する観光について、1909（明治 42）年 12 月 14 日の朝日新聞は横浜の次のような反応を記している。

「今後の如く大なる団体を組みて来る人々は、大抵、米国にても二流三流に位し、財力豊かなる者は多く不自由なる団体旅行を好まず、単独にて渡来するが例なれば、観光団歓迎等には、自己直接の利益を打算したる上にて斡旋するが常なる市内の主だちたる商人達はどうで思わしき顧客たる見込みなきものを、骨おりて歓待でもあるまじと、さてこそ鳴りを静めて他の雲行を見渡し居るならんと語れり。」

クリーブランド号の観光団が中流階級を組織したもので、従来の外客とは異なる消費動向を示すだろうと、外客の財力を冷静に推し量る商人たちの姿がここに示されている[20]。

(4) 明治日本の肖像画

日本を訪れた西欧人は日本にユートピアを見た。団体旅行を組織して近代ツーリズムを誕生させたトマス・クックは、1872（明治 5）年、初の世界一周旅行の途中に日本に出会い、「魅惑の帝国」と呼んだ（ブレンドン 1995：248）。クックは横浜や大阪、神戸、長崎に寄港し、山や海岸の景色、清潔な都市、自分たちを熱く歓迎する人々に心惹かれた。そして、日本の自然美は、今までに見たどこよりも美しいと賞賛した（図 8）（Cook, 1998, 30, 61）。

写真家のハーバート・G・ポンティングは、1902（明治 35）年から約 3 年間に 3 回、日本を訪れている。彼は日本を「この世の楽園（Lotus-Land）」と表現した（ポンティング 2005）。「美の楽園」ともいえる庭園（同上：59）、立ちすくむほどに美しい富士山、笑顔で優しさにあふれた女性たち。日本には、自然や風土から人びとの仕草や芸術性に至るまで、外客を魅了するものが多岐にわたって存在していた。

エリザ・R・シドモアは、1884（明治 17）年から 1902（明治 35）年という長いタイムスパンで、日本について語った。シドモアは、クックやポンティングと同様に日本を賞賛した。同時に、「近代ヨーロッパに一歩一歩近づき、十年ごとに変わりながら新鮮な素顔を見せ」つつも、「世界八大

図8　トマス・クックの『海外からの手紙――世界一周』（1998）の表紙絵

文明国の一翼を担う伝統ある日本は、今や中世的美風や東洋的画趣を惜しげなく捨て去って」いると、近代化による急激な変化を憂いた（シドモア 2002：7）。

「日本の芸術は、あらゆるところに痕跡を残し、すでに西側世界には革命を誘発しています。日本人の理念と表現からの素早い盗用は、ルネサンス（文芸復興）と同じような鮮明さで西洋に一世紀を画しました。両手に山盛りいっぱい贈ってくれた恩恵に対して、私たちは芸術至上主義の日本国民にお返しするものがありません。西洋の手本や教育、貿易上の無知な注文は、島帝国ニッポンに芸術的荒廃をもたらしました。外国の指図に従っているところはどこも素朴な製品の質が低下して俗悪となり、しかも安っぽくなりました。今や民族芸術の堕落を全力で阻止することが痛感され、かつ実行されています。」（同上：465-466）

「もしも、日本国民が自らの芸術、熟成した礼法、質素な暮らし、こまやかな家庭の魅力を失っていくならば、門戸開放のペリー提督は最悪の敵となるでしょう。もしも、かつて日本が中国からの渡来品を改良し工夫したように、西洋からの輸入品を洗練し変えていくならば、次の世紀、世界を凌駕することは不可能でしょうか？

海外旅行が、あらゆる地域を互いに親密にさせている今日、スイスは欧州から東西半球［全地球］へと影響を及ぼしています。世界の国々の遊び場やリゾートにふさわしいスイスは、立派な天職を持っています。しかし、すでに地球の美術工房となっている日本は、このスイス以上に世界融和の天職を持っているのではないでしょうか？」（同上、467）

ユートピアとして日本を描き、その変化を惜しむまなざし自体がオリエンタリズムであると批判的に論じることは、本稿のテーマではない。ここで確認しておきたいのは、この時期、外客のホストであった日本には、「観光のまなざし」が向けられるに十分な魅力＝資源があったということ、そのまなざしが、「差異から形成されていく」とすれば（アーリ 1995：2）、ジャポニズムの運動がそうであったように、日本は東洋と括っては収まりきらない独特の国として、「観光のまなざし」が向けられたということである。

1.3　国策としての観光推進――大正時代から戦前まで

(1) 国威誇示と外貨獲得資源としての観光

近代ツーリズムの父ともいえるトマス・クックの最初の世界一周の旅から40年目にあたる1912（明治45）年、外客を誘致し、外客に諸般の便宜を図ることを目的として、ジャパン・ツーリスト・ビュローが設立された[21]。かつての日本交通交社、現在のJTBの前身である。これによって、観光を推進して「漫遊外人」のもたらす移動と消

費のエネルギーを加速させることが、外貨獲得や輸出の促進、また良好な国際関係の構築に資するという考えのもとで、観光は国家的事業として明確に位置づけられることになる。ジャパン・ツーリスト・ビュローが計画・実行する事業は、①交通業者、ホテル、外人関係商店等漫遊外人に直接関係ある当業者の業務上に於ける改良を図り、かつ相互営業上の連絡利便を増進すること、②外国に我が邦の風景、事物を紹介し、かつ外人に対して旅行上必要なる報道を与えるの便を開くこと、③我が邦に於ける漫遊外人旅行上の便宜を増進し、かつ関係業者の弊風を矯正すること、④以上、各項のほか、第1条の目的を達するため、必要なる各種の施設を為すこと、であった（日本交通公社 1962：28）。

ジャパン・ツーリスト・ビュローは、翌1913（大正2）年、日本に世界周遊船・クリーブランド号が寄港したときに、最初に外客の斡旋を行った。また、斡旋のために縦覧個所の紹介を試みた。そのねらいは、「日光、鎌倉、奈良などの公開観覧箇所や、富士、箱根といった自然美鑑賞の地域のほかに、官庁、学校、工場、病院、庭園、柔、剣道場等の縦覧の便宜を計り、来遊外客に近代日本の諸施設をも広く見て貰い、日本に対する認識を新たにして貰う」ことであった（同上：58）。

表1は、ジャパン・ツーリスト・ビュローが斡旋する紹介地である。既に鉱害問題を発生させていた足尾銅山（図9）や満州の撫順炭坑が紹介地に名を連ねていることは、ある意味、興味深い。また、多くの外客が訪れた場所（紹介状発行先）を示しているのが表2である。後楽園（現在の小石川後楽園）が紹介状発行数で最多であり、次が大阪城となっている。

ジャパン・ツーリスト・ビュローは、斡旋経験を重ねるなかで、「日本固有の庭園とか城廓、あるいは柔道、剣道といった特技が喜ばれる」ことを知り、かつまた「第1次世界大戦に入ってからは、日本の工業界の急速な発展を反映して会社、工場等の参観」希望が増えたため、全国主要都市の工場も斡旋するようになった（同上：58）。

さらにこの頃、欧米その他からの外客だけでなく、明治時代にアメリカやハワイなどに移民として出た人びとも母国観光団を組織して日本を訪れるようになっていた[22]。

(2) 平和産業としての観光

大正時代は、第一次大戦（1914-18年）勃発、物価の高騰、関東大震災（1923年）と、観光の浮沈めまぐるしい時期であった。安定しない社会は観光にマイナスである。日本は魅力的な国として多くの外客を集めたが、観光は平和であることで成立する、いわば「平和産業」である。戦争がないというだけでなく、不安定な国際情勢や経済状況がないこと、災害がなく平穏無事であることが観光産業にとっていかに重要か。それを雄弁に物語るのが大正時代である。

1914（大正3）年。第一次大戦の開戦後には、ジャパン・ツーリスト・ビュローが工場視察という新たなニーズに応えた斡旋をおこなったものの、外客は激減し、観光産業は不況にあえぐことになった。その状況は、「ホテルの恐慌　観光客は来ず滞在の外人は帰国」という見出しのもとで、以下のように報じられている（1914（大正3）年8月13日朝日新聞）。

「観光外人を唯一の得意とするホテル業者は、昨今、すこぶる恐慌を来している。常ならば横浜に船が着く度に、必ず数人もしくは十数人の観光客の上陸を見ない事はない。殊に昨今の春頃から観光客は殊に増えてきて、各所のホテルは皆、室の少ないのに困っていた。今年は御即位の大典もあるので[23]、この分では定めし今年の客は多かろうと、大抵のところでは昨年の春あたりからにわか普請の増築に取りかかった程であったが、思いもかけぬ諒闇となって大分思わくの外れたところに、今度また戦争の打撃を受けることになったのである。帝国ホテル一軒でも、一年間の客は米国人二千四、五百、英国

表1　ジャパン・ツーリスト・ビュローの外人縦覧（遊覧）紹介地

東　京		地　方		
名　前	住　所	名　前		住　所
慶應義塾	芝区三田2の2	第三高等学校		京都市上京区吉田町
商船学校	深川区越中島	京都市立高等女学校		京都市堀川通り錦小路上ル
東京外国語学校	神田区錦町3丁目	大阪高等工業学校		大阪市北区玉江町
東京盲学校	小石川区雑司ヶ谷120	熊本高等工業学校		熊本県飽託郡黒髪村
共立女子職業学校	神田区一ツ橋通22	第七高等学校造士館		鹿島市山下町
東京市養育院	小石川区大塚辻町	第八高等学校		愛知県愛知郡呼続町
内務省東京衛生試験所	神田区和泉町	千葉医学専門学校		千葉県千葉町
農商務省農業試験場	北豊島郡瀧ノ川村西ヶ原	三菱造船所		長崎市飽ノ浦
王子製紙株式会社	北豊島郡王子町	金田炭坑	三菱合資会社	福岡県田川郡糸田村
大日本麦酒株式会社	本所区吾妻橋 佐竹屋敷浩養園あり、荏原郡目黒村	生野銀山		兵庫県朝来郡生野町
		三重製糸所		三重県三重郡三重村
		足尾銅山		栃木県足尾町
東京株式取引所	日本橋区兜町	大阪城		大阪市東区第四師団内
日本赤十社病院(ママ)	豊多摩郡下渋谷	九州帝国大学		福岡県筑紫郡千代村
講道館	小石川区大塚坂下町及同区下富坂町	第五高等学校		熊本県飽託郡黒髪村
		長崎医学専門学校		長崎県西彼杵郡浦上山里村
警視庁奨武会	麹町区有楽町	長崎高等商業学校		長崎県西彼杵郡上長崎村
砲兵工廠内後楽園	小石川区小石川町	山口高等商業学校		山口県吉敷郡山口町
浅野総一郎氏邸	芝区田町5の16	広島高等師範学校		広島市字国奉寺村
鹿島精一氏庭園	深川区島田町	第六高等学校		岡山市字国富
監獄		岡山医学専門学校		岡山市字内山下
東京帝国大学	本郷区元富士町	神戸高等商業学校		神戸市葺合町筒井村字籠池
東京帝国大学農科大学	荏原郡目黒村駒場	京都高等工芸学校		京都市上京区吉田町
東京高等商業学校	神田区一ツ橋通	京都市立美術工芸学校		京都市上京区吉田町
東京美術学校	上野公園内	京都市立盲唖学校		京都市釜座通椹木町南入ル
東京高等工業学校	浅草区蔵前片町	京都市立染織学校		京都市上京区烏丸通上立売上ル
日本女子大学	小石川区高田豊川町	和楽庵（稲畑氏邸）		京都市南禅寺
東京聾唖学校	小石川区指ヶ谷町	奈良女子高等師範学校		奈良市北魚屋西町
東京控訴院	麹町区西日比谷町	第四高等学校		金沢市仙石町
衆議院	麹町区内幸町	名古屋高等工業学校		愛知県愛知郡御器所村
印刷局	麹町区大手町	横浜商業学校		横浜市南太田町
中央気象台	麹町区代官町	東北帝国大学		仙台市片平町
帝国大学付属医院	本郷元富士町	第二高等学校		仙台市片平町
東京廃兵院	北豊島郡巣鴨村	秋田鉱山専門学校		秋田市字形町
日本赤十社(ママ)	芝区芝公園	盛岡高等農林学校		盛岡市上田町
東京慈恵会医院	芝区愛宕町2の8	小樽高等商業学校		北海道小樽区稲穂町
		造幣局		大阪市北区新川崎町
		京都市陶磁器試験所		下京区広道通五条上ル梅林町
		日本車両株式会社		名古屋市南区熱田町
		片倉八王子製糸所		東京府八王子町
		原富岡製糸所		群馬県富岡町北甘楽町
		撫順炭坑		満州

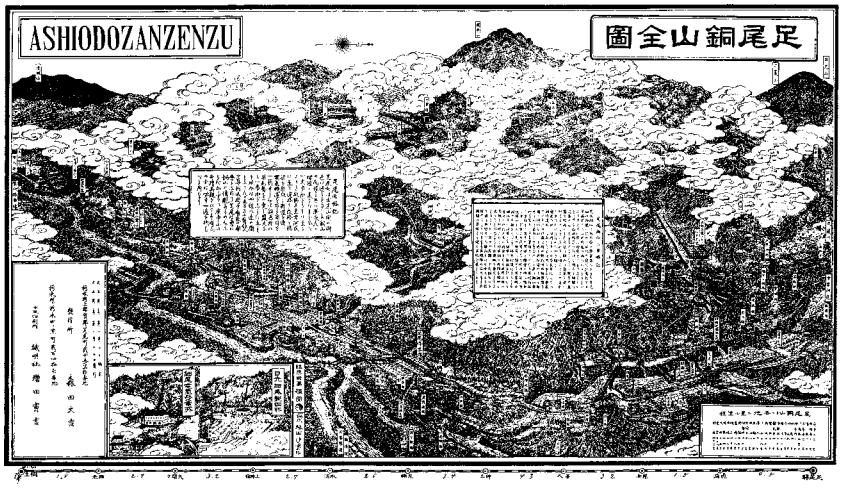
出典：ジャパン・ツーリスト・ビューロー1913『ツーリスト』第1号、40-45頁より作成。
注：白枠（□）は事前通知を必要とするところ、網掛け枠（▢）は事前通知を不要とするところを示す。

表2　ジャパン・ツーリスト・ビュローの主な遊覧地紹介状発行先（1914～1917年）

発行先	1914（大正3）年	1915（大正4）年	1916（大正5）年	1917（大正6）年
後楽園	90	24	60	87
造幣局	70	25	34	13
浅野邸紫雲閣	10	22	17	18
東京帝国大学	18	22	14	26
講道館	24	17	24	34
議事堂	16	14	16	14
女子職業学校	9	8	6	9
大阪城	86	40	38	15
大倉美術館	5	9	17	15
鹿島氏庭園	10	7	13	8
その他	62	62	106	149
発行総数（斡旋人数）	400（1,100）	250（800）	345（1,050）	388（1,200）

出典：日本交通公社1962『日本交通公社50年史』交通印刷株式会社、58頁より作成

図9　足尾銅山全図（1913（大正2）年／発行者：森田大吉）



出典：足尾AU企画センター編1989『目で見る足尾の百年　第4集（足尾村時代～大正10年）』足尾AU企画センター。

人千二、三百、独逸人二百五、六十、仏蘭西人二百二、三十で、その他各国人を合せると約五千人はあるが、夏期は大抵、山へ暑さを避けるために滞在客ははなはだ少ない。それでも昨今の今頃は五十人ばかりの滞在客があったが、昨今はその半数足らずの二十余人きり無い。それ

も観光客というようなのは無くて、大抵、外交官か商売人である。軽井沢、日光、箱根の中でも殊に軽井沢は避暑の外人を唯一のあてにして一年中の生計を立てている土地だけに大した打撃である。この戦争が始まってからは、外人はぞろぞろ帰り出して、今では軽井沢中で見る西洋人というのは女ばかり。男はもう殆ど一人も見られない。同地のホテルや西洋人相手の商人等は、相応の仕込みもしているのに、目算がガラリと外れてしまった。

観光客が来る季節は春と秋で、来月末から十二月始めまではどこのホテル業者もかき入れ時としているが、戦争中はさても来る宛はなし。半年も戦争が続いたなら全く立ち行かなくなるホテルが方々に出来ようとの話である。」

だが、ジャパン・ツーリスト・ビュローが、戦争にもかかわらず平和を維持していた日本を、「世界唯一の観光地」であると、直接に戦争に関係しないアメリカやオーストラリアに宣伝した効果からか、こうした状況も翌年末には好転する（日本交通公社 1962：66-67）。

戦争景気に沸くなかで、大隅内閣は大戦終了後の景気対策を睨んだ漫遊外客誘致策を経済調査会に諮問し、1916（大正 5）年には「漫遊外客誘致に関する施設如何」が可決された。ここでは、①外客誘致のための施設整備のために官民からなる常設の調査期間を設置すること、②外客誘致事業を理解させ、公徳心を養成し、外客を厚遇する良風美俗をなじませること、③政府や地方公共団体が経営困難のホテルを支援するとともに、ホテル建設などを通して外客の便利をはかること、④ジャパン・ツーリスト・ビュローの活動の促進、⑤ガイドの質の向上、そして⑥自然の風致と人工美の維持保存の必要性が指摘された（同上：69-71、朝日新聞 1916（大正 5）年 9 月 6 日）。国の経済政策として、観光の重要性が、明確に示されたのである。

1919（大正 8）年の帝国議会では、「外客の招致および待遇に関する建議」が決定した。この建議は、「世界の楽園」としての日本の観光資源の優位性を意識したものであった。『官報号外　大正八年三月十二日　衆議院議事速記録第二十二号』から以下に建議案を引用しておこう。

「我が帝国風光の明媚なるは世界に冠絶すというもあえて過言に非ざるべし。而して往昔以来、人工をもって建築美術その他、各般の施設を為せるものもまた枚挙に暇あらず。国内いたるところ名勝、旧跡、遊覧地に富み、外客をして感賞措く能わざらしむるもの、あに偶然なりとせむや。いわんや瀬戸内海とこれに臨める近畿方面、ならびに富士山を中心とせる甲駿及び豆相地方の如きは、真に本邦独特の景趣なるにおいてをや。今や欧州の大戦乱も既に講和の時期に入れり。国際間における障壁の撤去せらるると共に、列国相互民人の接触いよいよ頻繁かつ親密を加うるを疑わず。殊に帝国は世界の楽園として向後観光客の蝟集を見るや必せり。然るに現下外客の招致及び待遇についてほとんど何等の施設を見ざるに止まらず。さらにその方法の確立せるものなきは、対外関係ならびに対内事情の両点より見て、有形上また無形上まことに遺憾とする所なり。よって政府は旅館、船車、道路その他外客に対する各般の施設について速やかに適当の方法を確立し、着々これが実行に努められんことを望む。」

他方で、第一次世界大戦後、殊に 1918（大正 7）年には、外客が二の足を踏むほどに物価が急上昇し、宿泊客が日本を敬遠する状況がみられるようになった。たとえば、1920（大正 9）年の場合、日本のホテルの宿泊料や乗物の乗車代金は「世界のどの観光地よりも高い。だからつい苦情も出てくる。列車の寝台が短かいといっては困らせる外人、暑いから扇風機を廻せというから、その通りにすると、寒いから暖房にしてくれという。車掌も仕方ないので、扇風機をかけて暖房をいれ

る」という、笑うに笑えない状況だった（餌取 1989：318）。

さらに、1923（大正 12）年に関東大震災が発生する。またしても外客は激減し、観光も日本経済も低迷した。

この状況が変化するのは 1925（大正 14）年の終わり頃からである。アメリカの景気回復もあって、大規模な観光団が次々に日本にやってきた。「いずれも金に不自由のない人達ばかりで日本滞在中にバラまく金」、すなわち観光団の経済効果に大きな期待が寄せられた（1926（大正 15）年 1 月 1 日、朝日新聞）。観光は移民の送金とならんで貿易外収入の重要な部分を占めると指摘され、1925 年度で 1 億円以上の生糸、絹織物、綿糸布の貿易収入を除けば、移民送金は 5 千万円以上、観光客を含む外人の内地消費額が推定 4 千万円以上と、他の輸出品目よりも多いと推計された（1926（大正 15）年 3 月 20 日、朝日新聞）。

だからこそ、外客の誘致は積極的に行われた。1926（大正 15）年には日米両国の往来交通に便宜をはかるため入国査証料が廃止され、1930（昭和 5）年には「国際観光局」が設置された。ちょうど不況のさなか、財政立て直しのため、観光はいよいよ「国際観光」として脚光を浴びていくのである。1931（昭和 6）年の「国立公園法」の制定は、外客誘致のための目玉政策でもあったのである（田村 1948）。

(3) 保護の推進力ととしての観光

国際観光推進の目玉政策として国立公園が設置されたことに示されるように、観光は保護のための制度形成を推進した。国立公園の思想と制定史について論じた村串仁三郎は、「日本の国立公園思想は、初めから観光開発と自然保護の二つの目的を持って芽生えてきたのである」と明確に論じている（村串 2005：3）。そして実のところ、利用性や利便性を高めつつも、自然という観光資源を守ろうという動きは、早くも明治時代から見られていた。

村串や自然保護法で知られる畠山武道（2006）が指摘するように、最初に国立公園設置が議論されたのは日光や富士山で、既に 1911（明治 44）年の帝国議会に国立公園設立の請願書と建議書が出されていた。1870（明治 3）年に英国公使サー・ハリー・パークス、1872（明治 5）年に外交官のアーネスト・サトウが訪れ、早くも 1973（明治 6）年には外国人を宿泊させる金谷カッテージ・イン（日光金谷ホテルの前身）が開業していた日光では、1875（明治 8 年）に日光の社堂と名勝を守る会の設立準備がはじまり、1879（明治 12）年に「保晃会」が設立された。

徳川の祖廟として栄華を誇った日光東照宮の社領と杉並木は明治政府に公収・管理されていた。その結果、社堂を十分に維持管理できなくなり、杉並木も 1905（明治 38）年に立木のみ日光東照宮に戻されるまでの約 30 年間、粗放な扱いを受けることになる（古谷 1954：7）。保晃会の設立には、このような背景があった。保晃会は寄付を集めて原資とし、日光の保全をしようとしたが、目標金額にはなかなか届かなかった。他方で、特に奥日光の開発が進んだことを憂いて、日光の公園化というアイディアが生まれてきた（村串 2005：5-7）。

また箱根でも、「国立公園設立という具体的な議論は、明治 30 年代半ば頃から存在」していたが、「その理由は、箱根が日光同様に外国人のためにリゾート地として利用されていたからである」（同上：7）。箱根の富士屋ホテルは 1907（明治 40）年に日光の金谷ホテルから創業者の次男を婿養子に迎えており（山口 2007：96）、外国人を専門とするホテル同士で密な情報交換があったというのも一因と思われる。

しかし、国立公園設立の動きは進まなかった。かわりに 1919（大正 8）年に史蹟名勝天然紀念物保存法が制定される。日本における自然保護の先駆的な法と位置づけられる史蹟名勝天然紀念物保存法であるが、この法が国立公園法に先立って制定された理由について、村串は、第 1 に、自然美

や景観美は保護の緊急性に乏しかったが、史蹟、名勝、天然紀念物などは荒廃がすすみ保護の緊急性がいちじるしく高かった、第二に、政府が国立公園設立の請願を時期尚早とするも、史蹟、名勝、天然紀念物の保存に対する請願に前向きな姿勢をとった、第三に国立公園設立に比べて史蹟、名勝、天然紀念物の保護は財政負担が軽かった、という点を指摘している（村串 2005：33-34）。日光では、杉並木が東照宮の管理となって以降、大規模な補修・補植が行われてきたが、この法の制定により「日光並木街道附並木寄進碑」が史蹟に指定された（古谷 1954：7）。

ところで、史蹟名勝天然紀念物保存法は点としての保護にとどまる。だが、外客が好んだ日本的な景観、表 3 で「山紫水明」とか「風景明媚」と表現される、優れた観光資源の開発と保護の必要性は、大正期を通して十分に認識されるに至っていた。

前述した 1916（大正 5）年の「漫遊外客誘致に関する施設如何」でも自然の風地と人工美の維持保存の必要性が指摘されていた。1919（大正 8）年の「外客の招致および待遇に関する建議」にあっては、「国内いたるところ名勝、旧跡、遊覧地に富み、外客をして感賞措く能わざらしむるもの、あに偶然なりとせむや。いわんや瀬戸内海とこれに臨める近畿方面、ならびに富士山を中心とせる甲駿及び豆相地方の如きは、真に本邦独特の景趣なるにおいてをや」である。

このように、「外客の招致」のための面としての自然や風景の保護の発想は、明治時代から既にあった。大正時代にはその必要性が十分に認識されていた。ただしかし、それが具体化するには外貨獲得による国際収支の改善という明確な目的が必要であった。1930（昭和 5）年の「国際観光局」の設置、1931（昭和 6）年の「国立公園法」の制定は、国際経済収支の悪化を観光で補い、観光のために観光資源である自然や風景を政策的に保護するという戦略的なものであった[24]。

図 10 はジャパン・ツーリスト・ビュローの広告である。「外客誘致」を前面に押し出した広告が『国立公園』誌に掲載されているということに、観光と自然保護の親密な関係が示される。

とはいえ、国際観光の推進計画は、不況や財政難で一部を除き頓挫してしまう（砂本 1997：259）。また、国際観光の国にはそぐわない状況もみられるようになってきた。朝日新聞 1935（昭和 10）年 5 月 20 日は、「外人客スパイ視を“止めよう”と懇談　きょう重光外務次官　上京中の警察部長を招く」という見出しのもと、以下のように報じている。

表 3　大正初期の観光団がみた日本の例（朝日新聞）

新聞日付	事項	観光団
1912.11.27	郊外田園の珍しさ、純日本式の田園、稲刈りの束に目を奪われる。日本家屋の庭園の穏やかな自然調和、駅前の杉並木。（横浜から日光への移動中）	英国観光団
1913.04.27	京都の山紫水明は本で得ていた感想以上の美観。奈良の社では放飼されている鹿の「微笑する目」に日本のやさしさに触れたように感じた。	ロシア観光団
1913.05.04	内地の風景明媚と物質的進歩に驚嘆。（宮島・大阪・京都・伊勢・東京・日光など）	台湾内地観光団
1913.07.13	鵜飼見物でこのような壮観はかつて見たことがないと喜んだ。（長良川）	モスクワ観光団
1914.12.11	風光明媚、内海の絶景。（宮島）	英国少将の一行
1915.07.30	犬山に鵜飼を見物し、日本ラインの景勝を探る。	米婦人団
1915.08.09	保津川の急流下り。	米観光団

図 10　戦前の『国立公園』に掲載された広告

出典：国立公園協会 1934『国立公園』6。

「日本に来る外客の数は昨秋頃から諸種の国際会議関係を始めとして急激に増加し、本年に入って特にこの傾向が著しくなり、日本へ落ちる金額は近々一億円に達する見込みで、イタリー訪問の外客がイタリーに落す金高約 4 億円（イタリー観光局報告による昨年度統計）に次ぐ景気である。ところがこれら外人接遇にあたって、外客が往々にして日本の要塞地帯に関する法規関係に暗いのと、善意の外人旅行者に対する官憲の神経過敏と相俟って、しばしば問題を起こしてきたが、最近これを代表するような二つの事件が突発し、問題はひいて海外にも波及、重大化してきたので、外務省がまず乗り出し、出先公館を動かして一般外人に対し日本訪問の心得を与えると同時に、来訪後の接遇諸問題に関し近く内務当局と協議、具体的方針確立に進むことになった。その手始めとして重光外務次官は二十日正午上京中の関係十一府県警察部長を、更に来る三十日頃関係各府県特高課長ならびに外事課長を霞ヶ関官邸に招き、外務省から首脳部も出席、『外客接遇』に関し膝を交えて懇談することになった。」

こうして、時局により、日本は観光地にそぐわない状況になっていく。国際観光推進の声も、ほどなく戦時の靴音にかき消されてしまう。戦後、焦土に残された最後の資源として見いだされるまで、観光はこの国に居場所をなくしてしまうのである。

1.4　越境する時代の保護のまなざし

客体としての自然を観察するまなざし、鑑賞するまなざしはともに近代の産物である（関 2007：133-134）。そして論じてきたように、観光と自然や風景の保護もまた近代が生み出した双子である。

本論では、観光以前の江戸時代に遡りつつ、観光の黎明期である明治、大正から昭和初期の「まなざされる国」の観光について論じ、観光が越境という意味において重要だった時期にみられた、以下の 3 つの特徴を示してきた。

第 1 は、観光が国威誇示と外貨獲得のために国策として推進されたということである。浮世絵は日本文化に対する興味と関心をかきたて、ジャポニズムの波を生み出した。魅惑的な日本のイメージを播いた浮世絵は、あたかも「帝国の観光」の宣伝ビラのようなものだった。不平等条約を撤廃し、欧米の列強と肩を並べる近代国家形成を目指していた日本にとって、観光客に美しい風景、優れた工芸品や進んだ工場などを見て喜んでもらい、日本への称賛の声を強くしてもらうことは、当初、鹿鳴館外交と同様の意味を持っていただろう。日本は「まなざされる国」のホスト役だった。

さらにまた、観光は外貨獲得の手段として重要だった。マス・ツーリズムを生みだしたトマス・クックは、世界一周の旅で日本に出会い、多くの観光客を日本に送り出した。半官半民のジャパン・ツーリスト・ビュローの斡旋で京都や奈良、

日光や箱根など各地を訪れた外客は、先々で熱烈な歓迎を受けた。もちろん、そこには民間レベルの国際交流があり、観光の地域経済効果があった。

第2は、観光が平和産業だということである。大正時代から戦前に特に顕著なように、観光は国内的にも国際的にも平和でなくては成り立たない。「まなざされる国」は、第1次世界大戦時のように、ゲスト社会が戦争をしていれば観光客が減少する。まして、戦争へと突き進む国は観光の目的地に選ばれないし、実際、観光を云々するどころではない。

また、ここでいう平和産業とは、経済的、社会的に安定した状況において繁栄する産業だという意味でもあった。物価高騰で外客が日本での観光を避けたという例は、為替や物価の安定が観光地として選ばれるための重要な条件であることを示している。関東大震災とそれによる社会混乱が観光に与えたマイナスの影響は、災害が観光にダメージを与えることを宿命的に示唆している。

第3は、観光が自然保護の制度化を促しながら進展したということである。外国人の避暑地として賑わった日光や箱根から出てきた国立公園のアイディアは、しかしながら、「国立公園法」として制度化されるには、外貨獲得と国際収支の改善のための観光推進という、実利的な政策目的が明確になるのを待たねばならなかった。

これは、翻っていうならば、経済が低迷した時期に観光は政策的に選ばれたということである。国が外客の誘致や国際観光を推進した時期は3度ある。一度目がみてきたような戦前の動向である。二度目が戦後の復興期、そして三度目が「観光立国推進基本法」が制定（2006年）・施行（2007年）され、「観光庁」が設置（2008年）された昨今である。いずれも経済的必要から観光の推進が企図されたが、1度目は戦争で瓦解した。2度目は高度経済成長で霧消した。日本が、観光のホスト国として「まなざされる国」から「まなざす国」へと変化したからであった。

自然保護も、こうした観光の動向に連動していた。戦争は保護の対極にあったし、環境庁設置初期を除けば、高度経済成長からバブル崩壊まで長く保護政策は低空飛行を続けた。

外客の誘致や国際観光の推進を重要施策にしたときに国は責極的に保護のベクトルに動き、そこから離れたときに保護のベクトルからも離れていった。2010年3月11日を経験した現在は、3度目の試みがどう帰結するかが注視されることになろう。平和産業である観光が、東日本大震災という原発事故を伴う未曾有の大規模複合災害をまえに、どのように平穏無事を取り戻し、平和を構想していくか。観光立国の行方はそこにかかっている。

追記：本稿は2007～2010年度科研基盤研究（C）「自然環境を媒介とした共同性構築過程に関する研究－人と自然の関係誌を読み解く－」（代表・関礼子）、2010～2011年度科学基盤研究費（B）「越境システムの進化制度論的展開とコミュニティ」（代表・丹野清人）の研究成果の一部である。

[注]

1）古川・松田（2003）を参照のこと。同書は地域振興のための観光という選択肢、そして観光のための政策支援の問題点を紐解いている。ここでの問題意識は2011年末現在であっても、精彩を欠いていない。

2）高度経済成長を経た1970年前後で時期区分をすることもできる。1970年は、日本万国博覧会を契機に急速に交通網が整備され、山岳観光道路がいくつも開通し、観光が身近になる年であり、実際、訪日外国人旅行者数（インバウンド）と日本人海外旅行者数（アウトバウンド）が逆転した年である。1970年で区分するならば、観光者にまなざされる国から、観光者としてまなざす国に変化したという特徴が顕著にみえてくる。

3）四国八十八カ所めぐりなどといった巡礼形態は、日本の周遊型の旅のかたちを印象的に示す。また、「写し巡礼地」は、遠方の大巡礼地を身近な場に模

倣し、大巡礼地と同じ意味をその空間に与えた（近藤 2006）。このような模倣は庭園空間においても見られる。たとえば小石川後楽園では、江戸の旅空間を庭園のなかに再現するという趣向をみることができる（関 2010）。

4）『公害・環境判例百選』（森島・淡路 1994）に掲載されている。道路拡幅のための日光太郎杉伐採は文化的景観を損なうため認められないという 1969 年地裁判決（宇都宮地判昭 44.4.9）。高裁判決も風景や風致を損なう道路拡幅計画は認められないと判事した（東京高判昭 48.7.13）。なお、裁判では「金谷ホテル」の外国人客のガイドをしていた人も証人に立った（日光東照宮社務所 1973）。

5）もっとも、東海道を歩くことがブームとなったのは、いまが初めてではない。山本（1999：52）は東海道線開通後から戦前までの旧道への回帰について論じ、「東海道は過去のものとなると同時に従来と異る（ママ）展開をみせるようになったわけである。大正期を中心とした東海道の旅、それにより生み出されたものとは単に遺物となっていくものへの懐古や鎮魂歌ではなく、その後へと引き継がれていく。本稿では述べなかったが、東海道は人々に興味を抱かせながら尚今日に至っている」と記している。後述するように、確かに東海道への関心は今日でも高く、観光パンフレットでも「東海道五拾三次」など浮世絵のイメージを重ねた旧東海道が、観光資源や観光広告として積極的に用いられている。東海道を代表とする旧道歩きは「エコ旅」としてガイドブックが出版されているし（ウェスト・パブリシング編 2008）、大河ドラマや栄華・アニメなどの舞台を歩く「コンテンツ・ツーリズム」の文脈にも位置づけることができる（増淵 2010）。沼津市黄瀬川付近の老舗菓子店では、東海道歩きをする人は途切れなくいたが、近年では NHK 大河ドラマ『義経』（2005 年）放映で東海道を歩く人が多く店に立ち寄るようになったという（2012 年 1 月 8 日ヒアリングによる）。

6）ただし、アンベールは、神奈川など江戸に近づくと雨のためもあって悪路になったとも記している（アンベール 2004：205）。

7）なお、鈴木は、以下に示す苦痛に関連して、「小便桶を路傍に出して置くのは上方の風俗で、江戸では少なかった」と記している（鈴木 1965：240）。

8）ただし、「抜け参り」、「おかげ参り」、「ええじゃないか」は手形なし、所持金なしで行われた。

9）「東海道五拾三次」や「富嶽三十六景」で永谷園のお茶漬けのりを思い出す人もいるだろう。1965 年から 1997 年に「おまけ」で入っていたカードの応募券を 15 枚集めて送ると希望の名画選カードを 1 セットもらえる仕組みである（毎日新聞 1997 年 12 月 3 日、2010 年 9 月 19 日）。浮世絵のイメージはこのカードで、という人もいるかもしれない。浮世絵に懐かしさを感じる永谷園世代は、名画選セットにあった印象的な青を覚えているだろう。北斎の青はプルシアンブルーである。3.11 後の福島第 1 原発事故で汚染された土壌中の放射線セシウムをプルシアンブルーに吸着させることでほぼ全量を取り除くことができる技術が考案されたという（産経新聞 2011 年 9 月 2 日、日経新聞 2011 年 9 月 1 日、5 日、21 日）。

10）「栃木県の中学校が東京上野の『第二回勧業博覧会』を見学した」のが最初で、1886（明治 19 年）に「東京高等師範学校が千葉県内の『長途遠足』を実施している」（国立歴史民俗博物館 2008：48）。また、計画段階から「修学旅行」目的だった最初のものは、1887（明治 20）年だったという紹介もある（新井 2001）。

11）ただし、初期の記事には「観光」という言葉が含まれない広告・記事もヒットしている。たとえば熱海の温泉広告などである。

12）後述の『新編大言海』（大槻 1956）では、「観光繻子」は浅草の観光社または勧工場で売り出したところから名が付いたのではないかと記している。

13）文中の旧字体やカナ表記を読みやすく改め、句読点を付した。以下、旧字体の資料なども同様である。

14）観光と外客とがセットで考えられる状況は、第二次世界大戦後も続く。観光は「戦後にようやくし

がみついた最後の財源」であったし（餌取 1989：315）、戦後の新聞紙面に観光に関するトピックがみられる場合、「観光ということは日本の現状から考えて当然『国際観光』の意であることは良識ある者には直ちに了解出来るところ」（山崎 1949：98）であった。

15）1903（明治 36）年に「案内者取締規則」が発布された。悪質なガイドの問題については、常磐（1998：85-89）朝日新聞（1906（明治 39）年 5 月 8 日）などを参照のこと。

16）1893（明治 26）年建設部分を含む日光金谷ホテルは 2005（平成 17）年に国の登録有形文化財に登録された。富士谷ホテルも 1891（明治 24）年建設部分を含み 1997（平成 9）年に登録されている。ホテルの歴史については、山口（2007）、常磐（1998）を参照のこと。2011 年末現在、この二つのホテルを含む戦前創業のホテルが「クラッシックホテルの仲間たち」としてプロモーションを行っている。

17）船木（2010）、武内（1997）、富田（2008）などを参照のこと。

18）共通チケット発行は、うち 4 ホテルによって、1906（明治 39）年に検討された。

19）外客の増加に加え、この頃、政府は「日本大博覧会」の 1912（明治 45）年開催を計画しており、そのためにもホテル増設が急務とされていた。ただし、この博覧会計画は頓挫し、紆余曲折の後、1970 年の日本万博博覧会の開催でリベンジとなった（橋爪 2005：7）。

20）実際は、財力のある人も多く、他所での消費動向も旺盛だったため、商人たちは一転して歓迎ムードを盛り上げることになった（1910（明治 43）年 1 月 5 日、朝日新聞）。

21）ジャパン・ツーリスト・ビュロー会則の第 1 条。なお、会則の草案は、日本交通公社（1962：5-7）に掲載されている。1912 年はタイタニック号が大西洋航路で氷山に衝突し、沈没した年である。この悲劇の豪華客船の一等船室に富豪や名士など「漫遊外人」と呼ばれていた人びとが、三等客室には移民が乗っていたことは、ジェームズ・キャメロン監督の映画『タイタニック』（1997 年）で描かれたとおりである。

22）「故郷に錦を飾る」ためだけではなかった。1913（大正 2）年 11 月 6 日の朝日新聞は、「在米邦人の帰朝観光団は近頃大流行であるが、多くは写真結婚に満足しない青年が結婚のために帰ってくるのだ」と報じている。

23）天皇即位を祝って東京大正博覧会が開かれた（3 月 20 日～7 月 31 日）。博覧会字体は入場者数過去最多と成功であったが、外客を目当てとするホテルは博覧会の恩恵を大きく受けることはなかった。

24）法の制定に先だって「お国自慢と外国人観光客誘置を兼ねた国立公園誘致運動が全国に広がった」（畠山 2006：6）。これは、「保護することによって発展する」という観点でいえば、資源を持たざる「低開発国」が国立公園を設置して外国人観光客を誘致し、エコ・ツーリズムを展開することで豊かさを実現しようとする昨今の「持続可能な」観光モデルに重なる。旧植民地国では特に、自然の囲い込みがもたらす弊害としてエコファシズム批判を想起しなくてはならないが、経済の格差、消費水準の格差が外部から観光客を呼び込む動機づけになるという点にも類似性が認められる。

[参考文献]

足尾 AU 企画センター編 1989『目で見る足尾の百年 第 4 集（足尾村時代～大正 10 年）』足尾 AU 企画センター.

Aznar., J.C.,（Tradução de Antonio Sergio de Sousa y Raul Proença）－（年不詳）, *Album da Galeria de Pinturas do Museu do Louvre: Introdução Histórica e Texto Explicativo,* Editorial Labor, S.A.

ボダルト＝ベイリー（Bodart-Bailey, B.M.,）中直一訳 2009『ケンペル――礼節の国に来たりて』ミネルヴァ書房.

ブレンドン（Brendon, P.,）, 石井昭夫訳 1995（＝1991）『トマス・クック物語――近代ツーリズムの創始者』中央公論社.

Cook, T., 1998（＝1873）, *Letters from the sea and from foreign lands: descriptive of a tour round the world*, Routledge/Thoemmes Press.
餌取秀樹 1989「観光ニッポン物語」『観光日本、昔から今へ　旅風俗［Ⅰ］総合編――講座日本風俗史』雄山閣.
福田和美 1996「避暑地『日光』成立史（Ⅲ）――近代日光の繁栄と，その後の変遷」日光東照宮『大日光』67 号：67-75.
船木春仁 2010「最初の 197 回線――帝国ホテル［222 番］と大倉喜八郎［159 番］（連載第 27 回）」『365°』27，日本電信電話株式会社（企業広報誌）.
古川彰・松田素二編 2003『観光と環境の社会学（シリーズ環境社会学 4）』新曜社.
古谷清 1954「特別史跡『日光並木街道』の史的考察」日光東照宮『大日光』5：3-8.
後藤茂樹編 1975a『富嶽三十六景（浮世絵体系 13　別巻Ⅰ）』集英社.
後藤茂樹編 1975b『東海道五拾三次（浮世絵体系 14 別巻Ⅱ）』集英社.
羽田美也子 2005『ジャポニズム小説の世界――アメリカ編』彩流社.
橋爪紳也 2005「日本に博覧会がやってきた」橋爪紳也・寺下勍監修・解説『日本の博覧会　寺下勍コレクション（別冊太陽　日本のこころ 133）』平凡社.
畠山武道 2006『自然保護法講義［第 2 版］』北海道大学出版会.
アンベール（Humbert, A.,），茂森唯士訳 2004（＝1870）『絵で見る幕末日本』講談社学術文庫.
稲賀繁美 1992「解説」大島清次『ジャポニズム』講談社学術文庫.
石川英輔 2009『世直し大江戸学（NHK カルチャーラジオ　歴史再発見）』日本放送出版協会.
ジャパン・ツーリスト・ビューロー 1913『ツーリスト』1.
ケンペル（Kaempfer, E.,），斎藤信訳 1977（＝1777-79）『江戸参府旅行日記（東洋文庫 303）』平凡社.
金森敦子 2004『伊勢詣と江戸の旅――道中日記に見る旅の値段』文春新書.
神崎宣武 2004『江戸の旅文化』岩波新書.
鬼頭宏 2010『文明としての江戸システム』講談社学術文庫.
国立公園協会 1934『国立公園』6.
国立歴史民俗博物館 2008『旅――江戸の旅から鉄道旅行へ』（財）歴史民俗博物館振興会.
近藤隆二郎 2006「写されたシナリオの正統性と更新――写し巡礼地の生きのび方」宮内泰介編『コモンズをささえるしくみ――レジティマシーの環境社会学』新曜社.
増淵敏之 2010『物語を旅するひとびと――コンテンツ・ツーリズムとは何か』彩流社.
モロジャコフ（Молодяков, В.,），村野克明訳 2011『ジャポニズムのロシア――知られざる日露文化関係史』藤原書店.
森島昭夫・淡路剛久編 1994『公害・環境判例百選』（別冊ジュリスト 126）有斐閣.
村串仁三郎 2005『国立公園成立史の研究――開発と自然保護の確執を中心に』法政大学出版局
日本交通公社 1962『日本交通公社 50 年史』交通印刷株式会社.
日光東照宮社務所編 1973『太郎杉問題証言集』日光東照宮社務所.
大島延次郎 1989「日本交通発達史」『観光日本、昔から今へ　旅風俗［1］総合編――講座日本風俗史』雄山閣.
大島清次 1992『ジャポニズム』講談社学術文庫.
大槻文彦・大槻清彦 1956『新編大言海』冨山房.
ポンティング（Ponting, H. G.,），長岡祥三訳 2005（＝1910）『英国人写真家の見た明治日本――この世の楽園・日本』講談社学術文庫.
シドモア（Scidmore, E. R.,），外崎克久訳 2002（＝1902）『シドモア日本紀行』講談社学術文庫.
シュリーマン（Schliemann, H.,），石井和子訳 1998（＝1865）『シュリーマン旅行記　清国・日本』講談社学術文庫.
関礼子 2007「自然をめぐる合意の設計」松永澄夫編『環境――設計の思想』東信堂.

関礼子 2009「『環境の社会学』への招待」関礼子・中澤秀雄・丸山康司・田中求『環境の社会学』有斐閣.
関礼子 2010「庭園への歴史的まなざし――感性をみがくツアー」『感性哲学』10: 42-55.
新人物往来社 2005『異国人の見た幕末・明治 JAPAN』新人物往来社.
新谷恭明 2001「日本最初の修学旅行の記録について――平澤金之助『六州游記』の紹介」『九州大学大学院教育学研究紀要』4: 37-61.
砂本文彦 1997「1930 年代の国際観光政策で検討された観光関連施設整備構想」『1997 年度第 32 回日本都市計画学会学術研究論文集』: 259-264.
鈴木棠三 1965『絵本江戸風俗往来（東洋文庫 50)』平凡社.
武内孝夫 1997『帝国ホテル物語』現代書館.
田村剛 1948「『国立公園』復刊の辞」国立公園研究会『国立公園』復刊 1: 2-3.
ツュンベリー（Thunberg, C.P.,），高橋文訳 1994（＝1791，1793）『江戸参府随行記（東洋文庫 583)』平凡社.
常磐新平 1998『森と湖の館――日光金谷ホテルの百二十年』潮出版社.
富田昭次 2008『旅の風俗史』青弓社.
アーリ（Urry, J.,），加太宏邦訳 1995（＝1990）『観光のまなざし――現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局.
ウェスト・パブリシング 2008『エコ旅ニッポン 1　東海道を歩く旅』山と渓谷社.
山口由美 2007『箱根富士屋ホテル物語（増補版)』千早書房.
山本光正 1999「鉄道の発達と旧道への回帰――東海道を歩くということ」『国立歴史民俗博物館研究報告』82: 23-54.
山崎兌 1949「観光ホテル建設計画について」『日本建築学会論文集』39: 98-111.